

研究課題	シャント発声者とフレイル・サルコペニアとの関係
支援番号	GC04620241
研究事業期間	令和6年4月1日から令和7年3月31日
助成金総額	500,000
研究代表者 (所属機関)	松本 香好美（日本歯科大学新潟生命歯学部 耳鼻咽喉科学）
研究分担者 (所属機関)	佐藤雄一郎（日本歯科大学新潟生命歯学部）、高橋圭三（日本歯科大学新潟生命歯学部）、今西里佳（新潟医療福祉大学）
研究キーワード	シャント発声者 フレイル サルコペニア QOL
研究実績 の概要	<p>【目的】咽頭・喉頭がん患者は、がんの進行に伴い、喉頭全摘出（喉摘）術を行うことで失声する。失声すると、コミュニケーションがとれず、鬱症状を呈することが多いと報告されている。咽頭・喉頭がん患者は閉じこもりや活動量の低下が起こっていることが疑われるが、現状、明らかになっていない。そこで、本研究の目的は、咽頭・喉頭がんによる喉摘術後でシャント発声（代用音声の1つ）を行っている者を対象として、体組成、フレイルやサルコペニア、QOL、身体活動量を評価し、フレイル・サルコペニアの実態を明らかにすることとした。</p> <p>【方法】体組成はInBodyを用い、フレイルは日本語版フレイル基準（J-CHS基準）を用いて評価を行い、サルコペニアはAsian Working Group for Sarcopenia 2019（AWGS2019）に基づいた診断方法を用いた。下腿周径、握力、5回立ち上がり、骨格筋量を検査して、サルコペニアの確定診断を行い、骨格筋量の検査には生体電気インピーダンス法（BIA法）を用いた。QOL評価にはEuropean Organization for Research and Treatment of Cancer Quality of Life Questionnaire日本語版を用いた。また身体活動量はライフコーダーGSを用いて4週間の歩数を調査した。</p> <p>【結果】文書による同意が得られたシャント発声者で全検査項目を完遂した14名（平均年齢<math>71.8 \pm 8.7</math>歳）を解析対象とした。男性13名および女性1名であり、BMIは<math>22.5 \pm 3.6 \text{ kg/m}^2</math>であった。ロバストは7名であり、プレフレイルが7名で、フレイルは0名であった。ロバスト群とプレフレイル群における比較では、歩行速度はロバスト群が<math>0.8 \pm 0.1 \text{ m/秒}</math>であり、プレフレイル群が<math>1.1 \pm 0.1 \text{ m/秒}</math>で（<math>p &lt; 0.001</math>）、遅速であった。サルコペニアはロバスト群に1名、プレフレイル群に2名が存在した。2群間で体組成やQOLに有意差はなかったが、プレフレイル群の方が1週間の運動日数や1日平均歩数が多く、運動習慣が高い傾向であった。喉頭全摘者の健康寿命延伸や介護予防を図るためには、フレイルやサルコペニア対策を検討することは意義があると考えている。本研究結果から検討課題を見出している。継続して本疾患術後の症例評価を行っていく予定である。</p>